

～各種募金は、下記【注文番号】で、毎週受付しております。ご協力をお願い致します～

- ★【注文番号:500251】東海第二原発差止訴訟基金 1口500円
★【注文番号:500252】関東子ども健康調査支援基金 1口1000円
★【注文番号:500253】被災地等を支援する【JOSOたすけあい基金】 1口500円
★【注文番号:500254】JOSO脱プラ基金 1口500円
★【注文番号:500255】鈴木牧場・新牛舎応援基金 1口500円(期間:～2025年3月4回まで)
★【注文番号:500256】脱原発と暮らし見直し委員会「12年のまとめ」の印刷カンパ 1口200円



News Letter

2024年12月3回号発行: 常総生協広報G
2024.12.2

2024年度年末年始供給スケジュールのお知らせ

	日	月	火	水	木	金	土
12月1回供給 カタログ配布 注文書提出	12/1	2	3	4	5	6	7
12月2回供給 カタログ配布 注文書提出	休	12月3回カタログ配布 (12月2回分提出)					休
12月3回供給 カタログ配布 注文書提出	8	9	10	11	12	13	14
12月4回 5回に変則供給です	休	12月4回・5回カタログ配布 (12月3回提出)					休
12月5回は商 品の受け取り のみとなります	15	16	17	18	19	20	21
12月5回は商 品の受け取り のみとなります	休	1月1回カタログ配布 (12月4回・12月5回 2週分同時提出)					休
12月5回は商 品の受け取り のみとなります	22	23	24	25	26	27	28
12月5回は商 品の受け取り のみとなります	休	1月2回カタログ配布 (1月1回分提出)					12月5回 (年末 特別号)
12月5回は商 品の受け取り のみとなります	29	30	31	1月1日	2	3	4
12月5回は商 品の受け取り のみとなります	12月5回 (年末特別号)		生協お休みです				
1月1回供給 カタログ配布 注文書提出	5	6	7	8	9	10	11
1月1回供給 カタログ配布 注文書提出	休	1月3回カタログ配布 (1月2回分提出)					休

**12月5回は年末(お正月関連)商品が中心となる「特別号」となります。
定番品は12月4回にご利用ください。**

【年末・年始の配達】

- 12月5回は12月28日(土)～30日(月)で変則的な供給です。1月1回(1月6日～の週)は通常通りの月～金の配達で1月2回の注文提出です！ →次ページに続く

2024年12月の予定

○生協基幹運営/地域活動・催し●

○「常総っ子応援団」流星台プレイパーク: 毎週木曜日10～14時
活動中です！(出入り自由)

【お知らせ】秋の生協祭につきまして: 今年の秋は開催せず、来年度に50周年の集いなどを企画出来ればと思います。

○提携・協同・連帯企画●

12/8(日) 甲状腺検診@流山
12/15(日) 生活相談会@つくば・市民ネットワーク事務所
12/25(水) 東海第二原発運転差し止め訴訟控訴審 第5回口頭弁論(@東京高等裁判所)

- マイセット登録商品に関して** 12月5回の供給時にお届けできない商品があります。12月5回の注文用紙のマイセット・予約商品欄に掲載してお知らせしますので、必ずご確認ください。
- 予約商品（野菜セット、お米、鈴木牧場牛乳など）に関して** 予約登録した際にお渡ししたスケジュール通りの供給になります。予めご確認ください。お手元にスケジュールがない場合、供給担当もしくは生協本部(0297-48-4911)までご連絡ください。
- 前日OK商品、ふるさと便→12月5回は受付けておりません。**ご了承ください。

第2回 オーガニック給食フォーラム参加報告 その3（終）

11/8茨城県常陸大宮市にて開催された「第2回 オーガニック給食フォーラム」。常総生協も会議室をサテライト会場として組合員・員外の方も一緒に聴講しました。報告の続きと参加者の感想です。

オーガニック給食を実現したJA、実現に向けた活動の報告

農協と行政のタイアップで実現：2017年茨城県に大井川県知事が誕生し、2019年に「県北振興」の名目でオーガニックステップアップ事業がスタート。最大70%の補助率。2020年に常陸大宮市長が「オーガニック給食」を公約として当選。この時JA常陸の秋山豊組合長は「農協が動かなくては！」と腹を決めたそう。秋山さんは、慣行栽培（農薬・化学肥料を使う）をしていた農家を1年以上説得。「有機農業では収入が減って、職員のボーナスが出せない」と反対していた農家も根負け。いばらき有機農業技術研究会の松岡先生と契約し、週3日技術指導をしてもらって、じゃがいも、サツマイモ、かぼちゃ、にんじんの栽培に成功。自信を付けた農家は自ら稲作にチャレンジ。NPO法人民間稲作研究所の稲葉先生に指導を仰ぎ、技術を習得。地元の牛糞・鶏糞を堆肥にし、2023年初めて有機米に挑戦。成功。有機栽培の技術は進んでいる。収量は通常の1反9俵より少し減って7俵だったものの、市が学校給食用に買い上げたため農家の所得はアップ。確実にこの価格で買い取ってくれるという約束があれば、農協（農家）は生産できる。有機への流れができ、常陸大宮市15校2500食の給食オーガニック100%に向けて取り組んでいる。お米の名前は『ゆうき凛々』（アンパンマンの歌がヒント）。来年は給食コーディネーターを導入予定とのこと。報告のあと、壇上に農家さんも含めて10人ほどの現場の担当者があがり一言ずつ挨拶。「子ども達のために」と生き生きと話す様子がとても印象的でした。

残った言葉：島村奈津さんは「子ども達のために、というのは我が子のためだなんてケチな話ではない。次の世代のために、ハンディーがある人のために、高齢化社会で過ごしにくそうにしている人のために何ができるのか、その一つがオーガニック給食ではないか」。堤未果さんは「慣行or有機栽培」で分断しなかった常陸の取り組みを称賛。「正しさよりも優しさで繋がってほしい」。野々山理恵子さんは「対立よりも共生を」「カリスマは不要。3.5%の行動者がいれば」と話しました。協同組合にできることがたくさんあること、その可能性を感じるとてもいいフォーラムでした。（文責：職員 木本）

★参加者の感想★

・ 沢山の農協が有機農業に取り組み始めているのを知り嬉しかった。消費者が有機を広める鍵で、なぜ有機がいいかを上手く伝えられたらと思う。生協のサテライト会場で皆さんと一緒に話を聞けて良かった。2022年の第1回は自宅で聞いたが、その時からかなり進んでいると思った。鈴木宣弘さんの話から、農業を支える政策が絶対必要と思う。（柏市・Mさん）

・ この企画は良かった。久しぶりに刺激的でした。鈴木教授や堤さんの世界を捉えての問題提起も改めてとても勉強になりました。

「オーガニック給食」というコンセプトが「日本の食」の危機を乗り越えるきっかけになりそうな大きなウネリが感じられました。生協の果たす役割の大きさへの認識を新たにしました。日本の農村に可能性を感じました。ありがとうございました。さて、私は何が出来るだろう？（流山市・Kさん）

・ 農業問題は消費者問題。どうやったらオーガニック・有機を広められるか？沢山の人が頑張っていて勇気をもらった。（牛久市・Nさん）

・ 子どもの病気をきっかけに健康や食について考えるようになり、毎日食べる給食がオーガニックになったらいいと思い、その実現へと活動を始めました。オーガニック給食が明るい未来を作るものだと思い実感しました。今回参加したことで、私が出来ることがまだまだあると思いました。もっと仲間を増やし地元でオーガニック給食を実現したいです。（我孫子市・Sさん）

・ 鈴木氏・堤氏の講演を楽しみに申込みました。学校給食を大切に、日本の食の基本になっていくよう大事に考えていきます。特にパン食ではなく米食で(全国小中学校)、日本の食料自給率の問題の解決へ進められたらと希望します。米食であれば今までの家庭料理で、日本の食材が多く消費されるのではと思います。（つくば市・Oさん）



常総生協に関わるみなさん、こんにちは(^^)
ハチドリ仲間(南米・先住民の昔話、森の火を消そうと
小さな嘴・くちばしで水を運ぶハチドリのお話より)をつなぐ
新しいコーナー「ハチドリ・レター」です。
今週は監事の松田さんからです♪



フリーバーンに憩う、鈴木牧場の牛たちに会ってきました♪ パート4

◎におわない牧場、それが鈴木牧場 & 熊谷先生のお話。

鈴木牧場に行ったことのある人はわかると思うが、鈴木牧場はにおわない。動物がいれば、通常におうものだが、におわない。牛という大動物が、仔牛も入れれば50頭以上暮らしているというのに、におわない。なぜか。それは牛たちが健康であるからに他ならない。鈴木さんが目指したのは、まさに「牛を健康にする」こと。私が25年ほど前に牛乳担当理事としてお訪ねしていた頃、鈴木さんは熊谷先生という北海道在住の獣医さんに師事しておられた。熊谷先生は「土づくり」こそが牛を健康にすると言って、教えを乞う酪農家に土作りを指導しておられた。良い土から良い牧草が育ち、牛を健康にする。言えば簡単だが、土というのは一朝一夕にはできない。鈴木さんも「このエサではだめだ。このエサはみんな捨てなさい」と言われたこともあるという。だんだん良くなって、濃い緑色の牧草が、薄い萌黄色のような、今の鈴木牧場のイメージカラーの色の牧草になって、牛はどんどん元気になっていったと。7～8年かかったという。



それから20数年、鈴木牧場の土づくりは、さらなる進化を遂げ、堆肥の山であっても匂わなくなっていた。牛の糞に枯れ葉や粉碎した伐採枝などを混ぜ、微生物の力で発酵した堆肥は、スコップを入れると湯気が出るほどの熱を持っていた。その後、完全に発酵が進むと、まるで炭のように黒から白っぽくなる。言われるがままに手で触ってみた。パラパラとして、臭くはなかった。その発酵堆肥を撒いた畑で育った牧草は、萌黄色のおいしい牧草になる。さらに、その牧草を発酵させたものを言われるがままに噛んでみた。少し酸味があって、噛むと甘みもあって、これは牛にはおいしいだろうと思った。

鈴木牧場では牧草の自給率は6～7割に達しているという。家畜の飼料を輸入に頼る日本では珍しい割合だ。昨今の円安で廃業する酪農家も多いと聞くが、鈴木牧場では自給率を高めることと、購入する穀物飼料も国内からの購入を探ってきたおかげで、影響は少ないという。鈴木牧場の牛乳、ヨーグルト、チーズを購入する私たちも一安心だ。健康な土、健康な牧草、健康な牛、素晴らしい牧場主に感謝。

「あきたこまちR」に関する署名にご協力をお願いします！

2025年から、秋田県が供給するイネの種の「あきたこまち」は、すべて新品種の「あきたこまちR」※に切り替えられます。※放射線によってカドミウムを吸う遺伝子が改変された品種。以下の問題から、「あきたこまちR」に関する、別紙の署名（秋田県・農水省・消費者庁・他都道府県宛）にご協力ください。

重イオンビーム放射線育種米 「あきたこまちR」 なにが問題？

5 学校給食にも「あきたこまちR」！？

産地と品種名の確認を

「あきたこまち」は、全国各地の学校給食でも使用されています。「あきたこまち」は全国的に生産されているので、必ずしも2025年産からすべての「あきたこまち」が「あきたこまちR」に切り替えられるわけではありません。2025年の秋田県産種もみを使用している産地・生産者団体・農家及び流通業者だけが「あきたこまちR」になります。学校給食に「あきたこまち」を使っているところは、2025年の種もみの産地と品種名をよく確認しましょう。

「銘柄」名ではなく、「品種名」の確認が必要です。学校給食関係者や教育委員会にこのことを伝え、確認してもらいましょう。

6 「有機」認証も可？

有機の原則軽視の農林水産省見解

農林水産省は全国の有機農家や消費者団体に説明や相談もなく、「『あきたこまちR』は有機JAS認証を取得できる」と公表しました。自然との共生、自然の摂理を逸脱しない農業という「有機」の基本原則に照らしてみると、重イオンビームによって遺伝子を改変した「コシヒカリ環1号」を祖先にもつ「あきたこまちR」のような品種を有機農業に使うことは納得できません。秋田県有機農業推進協議会も、「あきたこまちRを有機農産物とは認めません」という声明を出しています。消費者が「有機」「オーガニック」に期待する認識とも相容れません。

7 なぜ？ 全面転換

全国展開への布石なのか

かつての鉱山の乱開発により、日本では限られていますが、カドミウム汚染地域が存在します。秋田県の場合、コメ中のカドミウム基準値0.4mg/kg (0.4ppm) を超える米の割合は0.3%以下とされており、「湛水管理」とコメの検査により基準値を超える米は市場には一切出ていません。土壌や気象条件で基準値を超える恐れがある地域は2割程度とされています。しかし秋田県は、県域全体で「あきたこまちR」に切り替える全面転換の道を選びました。秋田県内外の消費者は計画の延期と見直しを求める署名8,038筆を県に提出しています。「あきたこまちR」が不要な地域でも変えさせてしまうのは、そうしないと「風評被害」が発生するからだ、と秋田県は説明していますが、しかし、本当に必要なのは、汚染そのものをなくすることではないでしょうか？

◎全国のお米が「コシヒカリ環1号」等に切り替わる危機に直面しています

農林水産省は2018年に全国のお米の主力品種を「コシヒカリ環1号」とその後代交配種に切り替えていく指針を策定しました。2030年までに5割の都道府県での導入を目標に、現時点で秋田県だけでなく、宮城県、新潟県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、島根県、山口県、宮崎県でも進められています。多くの人が知らないうちに、全国のお米が重イオンビーム放射線育種の米に切り替えられようとしています。止めるなら今です！



署名はこちら

OKシーブプロジェクト <https://okseed.jp>

◎従来の「あきたこまち」を、そして日本のお米を守りたい！

オンライン署名で「あきたこまちR」を食べたくない」という声をひとつに集め、秋田県や農水省や消費者庁に届けます。ぜひ、署名に賛同をお願いします。

重イオンビーム放射線育種米

「あきたこまちR」 なにが問題？

2025年から、秋田県が供給する種もみ（イネの種子）のうち、これまでの「あきたこまち」はすべて新品種「あきたこまちR」に切り替えられます。この「あきたこまちR」とは、どのようなお米なのでしょう。そして、なにが問題なのでしょう。問題点を7つの側面から考えます。

1 お米を選べない

実際の中身は「あきたこまちR」？

2025年産から「秋田県産あきたこまち」と表示してあったとしても、その多くは新品種「あきたこまちR」になります。秋田県が、「あきたこまち」と「あきたこまちR」とは品種間の品質の評価に差がなく「同等」として2つの品種をまとめて「産地品種銘柄」＜あきたこまち＞と呼ぶことにしたからです。しかし、これでは消費者は、それが「あきたこまち」なのか、それとも新品種「あきたこまちR」なのか知る事ができません。「あきたこまち」と「あきたこまちR」は著しく異なるお米です。このような表示は、消費者の知る権利、選ぶ権利を侵害するものです。

2 遺伝子を改変

品種開発に重イオンビームを使用

「あきたこまちR」の祖先にあたる「コシヒカリ環1号」は、種子に放射線を当てて人為的な突然変異を新品種の開発に利用する「放射線育種」でつくられた新品種です。これには、人工的な放射線（電子線）重イオンビームが使われました。従来使われてきたガンマ線（電磁波の一種）と違い、重イオンビーム放射線育種では遺伝子の二重鎖が一挙に直接切断され、その結果、未知のタンパク質ができてきたり、他の遺伝子に影響を与える可能性を否定できません。遺伝子が改変された「あきたこまちR」が健康や環境にどのような影響を与えるかわかりません。

3 自家採種禁止・特許付き

主食のお米の種子を農家は毎年購入？

従来の「あきたこまち」は品種登録もされていない一般品種で、自由に自家採種ができるお米でした。一方、「あきたこまちR」は、品種登録されているだけでなく、祖先の「コシヒカリ環1号」に付けられた「特許」が付いてまわります。改正種苗法により、登録品種の自家採種には育成者権者（秋田県）の許諾が必要になります。秋田県は「あきたこまちR」の自家採種を禁止したので、農家は毎年、特許料が上乗せされた種子を購入しなければならなくなります。

4 マンガンが低下

減収のリスクと資材や農薬がふえる

「あきたこまちR」はカドミウム低吸収性という特性をもっていますが、これは同時にマンガンの稲や米への吸収も抑えます。人にとってもマンガンは必須微量ミネラルですが、稲にとってもマンガンは光合成に不可欠な物質であり、マンガン不足になると葉枯れ病にかかりやすくなります。また、低マンガンの水田では出穂期に高温が続くと収穫が2～3割減る可能性も指摘されています。このため、マンガン含有資材や病気予防のための農薬（殺菌剤）の使用を増やす必要があります。経費や手間がふえるだけでなく、環境や健康への影響も懸念されます。